



今月のことば

Words of the Month

不要不急

日本弁理士会副会長

小西 恵

はじめに

名刺が減らない。人に会わないからだ。あまりに名刺交換の機会がないので、ついに名刺入れを常時持ち歩くのを止めた。名刺入れの前ポケットに入れていた交通系 IC カードは財布に移動した。

口紅も減らない。マスクの内側に染み着いてしまうからだ。食事の前に敢えて口紅は付けないから、口紅を付けるのはマスクを外してウェブ会議にビデオ参加するときくらいである。年初に海外旅行した友達が、免税店で誤った型番の口紅を渡されて困惑していた。誰でもこだわりの色があり、型番が1番でも異なると印象が変わってしまうものだ。次の海外出張のときに買ってきてあげると安請け合いしたが、今そもそも海外に行けない。

ゴールデンウィークはステイホーム週間ということで、「コンティジョン」をオンデマンドで3回観た。Contagion, 伝染の意である。2011年公開の映画であるが、新型ウイルス感染症のパンデミックを主題としており、最近のオンデマンド再生回数ランキングではトップに返り咲いていた。致死率の極めて高い新型ウイルスとの設定であり、国際線フライトや在来線列車などの交通キャリアを介して瞬く間に世界中に拡がったパンデミックの生々しい描写は目を覆うほどであったが、最初の感染者となるグイネス・パルトロウがカジノで新型ウイルスに感染してから21日目にワクチンが生成でき、133日目には治験を経たワクチンの一般人への接種が始まる。これは映画ならではのスピード感で、さすがに現実世界で期待できる時間軸ではないだろう。

新型ウイルスは直径約100nm程度で、 μm オーダーにも満たないが、目に見えない新型ウイルスが、私たちの価値観、ものごとの優先順位を瞬く間に変えた。そのスピード感たるや、近年喧しい第四次産業革命の比ではない。1年前には2020

年6月現在の世界を予想だにできなかった。社会変革はある日突然、強制的にやってくる。100年に一度の事態というのも頷ける。

スペイン風邪

100年に一度といえば、パンデミックはほぼ100年に1回の周期ともいわれており、20世紀最大のパンデミックは、1918年から1920年、スペイン風邪と通称されるH1N1インフルエンザウイルスによりもたらされた。発生源がスペインでないのにスペイン風邪と呼ばれるのは、第一次大戦下の中立国でありパンデミックに関する報道が抑圧されなかったからとも、スペイン王族の感染のインパクトが強かったからともいわれている。当時の世界人口の18億人の3割近い約5億人が感染し、死者数は諸説あるが、1740万人から多くて1億人とされており、スペイン風邪の蔓延による戦力不足や士気低下は第一次世界大戦の終結を早めたとの分析もある。

1918年は、抗生物質が発明される前であり、死因の多くはインフルエンザウイルスではなく、細菌による二次感染（細菌性肺炎）と現在では考えられているようだ。そもそも1918年当時には、スペイン風邪の病原体は細菌であると信じられており、ウイルス自体が未知であったから、当時の予防接種に効果はない。ウイルスの観察を可能にする電子顕微鏡の開発やインフルエンザウイルスの分離が実現したのは1930年代であり、10年以上を俟たなければならなかった。尤も、当時の科学技術進歩のスパンを考えると、10年はさほど長期間とはいえず、スペイン風邪のパンデミックが疫学感染症学の技術開発を加速させた側面もあるのではないかと。

スペイン風邪は、日本でも約2300万人の患者と約38万人の死者をもたらした（内務省統計）、これは当時の日本の人口約5600万人のそれぞれ約

41%および約0.7%に上る。基本再生産数が不明だが、感染率は集団免疫のレベルに近づきつつあったようにも思われる。当時日本では、「流行性感冒」と通称されており、1919年（大正8年）1月、内務省衛生局は、一般向けに「流行性感冒予防心得」を広報している。この予防心得は、密集場所に立ち入らないこと、人の集まっている場所、電車、自動車などの内ではマスク（「呼吸保護器」と呼ばれていたらしい）を着用すること、うがいや手洗いの励行等を推奨するものであり、現在の三密回避や不要不急の外出自粛と共通する。ウイルスすら発見されていない100年前と現在とで、一人一人が防疫上すべきことは基本的に不変であることが分かる。人の遺伝的進化の時間軸では、100年程度は一瞬に過ぎない。

不要不急線

「不要不急」を聞かない日がない。林先生に訊くまでもなく、字義どおりの意味で極めて明確な語である。中国の故事に由来するわけでもなく、含蓄には欠ける。

語源かどうか定かではないが、不要不急といえは「不要不急線」に遡るようだ。1943年から1944年に掛けて、政府の命令によって休止または廃止された鉄道路線のことである。戦時体制で物資が不足する中、武器生産に必要な物資であるレールなどの金属を拠出させるため、軍事上重要ではない鉄道路線を「不要不急線」と指定して、線路を撤去したことに由来する。

国鉄線では約300kmに及ぶ約21線区が、私鉄線では約270kmに及ぶ約60線区が、不要不急線に指定されて休廃止された。神奈川県国府津と静岡県沼津を結ぶJR御殿場線は単線である。御殿場の研究開発センタを訪問した際に、クライアントから、かつては複線であったが不要不急線として単線化されてレールを供出したと聞いた。鉄道ファンではないので、「不要不急線」の語を知ったのはそのときである。不要不急か否かは、路線の採算等も考慮されたであろうが、基本的には軍事上の重要度や軍事徴用の必要性により判断されたこととなる。

翻って、不要不急の外出とは何であろうか。軍事徴用の軸がないのであるから、自分が感染しない、かつ人を感染させないために控えるべき外出が「不要不急」であって、これは基準というには曖昧であり、むしろ評価に近いのではないかと

本人は基準を与えるガイドラインを好みがちであると感じることが多いが、不要不急か否かは、各人の健康上、家族構成上、通勤移動等のリスク、居住地域の感染状況、外出の緊急性、不可欠性、代替性等のファクタから個別に評価すべきものであって、緊急事態宣言が解除された中、自分の行動規範は自分自身の状況やリスク、優先順位に照らしてある程度自分で立てるべきではないか。会合、会食やイベントに行くのを控えるのは、典型的に三密回避の目的を達成しやすいからに過ぎず、外出先の感染症対策に依るし、誰もが一律に控えるのが妥当とは限らない。手段が目的化すると、行動の選択肢を過度に狭め、日常生活や経済活動に萎縮効果をもたらす上に、人にも不寛容になりがちになり、あまりいいことはない。他人の「不要不急」を判断するのは、引用例なくして進歩性を判断しようとするにも似ていると思う。

ウェブ会議考

今年度に入ってから、集合しての会合がほぼない。4月後半は役員会すら開催を取り止めメールベースの審議に変えた。ウェブ会議は、移動時間がゼロであり、資料の共有もできて、効率性が高く、今までなぜ積極的に利用しなかったのかと思うほどだ。特許庁審査官とのウェブ面接も、もう2回実施し、所期の面接目的も問題なく達成できた。

ただ、最初の頃から気付いたことがある。参加者の表情に笑顔がないのである。この人こんな怖い顔だっけと心が出ることもある。参加者とアイコンタクトができないし、画像音声から得られる情報量が少ないから、参加者が何を考えているかが読み取れない。物理的な場を共有しないから、場の空気が、読めないというか、そもそもない。特に、参加者が多い場合には、各人の画像はサムネイル並みに存在感が希薄となり、ビデオ参加でない人に至っては本当に参加してくれているかも定かでない。ウェブ会議では、初対面の人と知り合った感覚が持てない。隣の人との内緒話もできない。MR（Mixed Reality）等で恰も集合しているかのような臨場感は技術的に実現できるかもしれないが、これからはすべてウェブ会議との見解には懐疑的である。

今年度、国際活動センターを担当しているが、ウェブ会議の利点を一番享受できる附属機関になるのではないかと考えている。今年度予定されて

いた国際会議が次々と延期またはウェブ開催に変更になっており、ウェブ参加であれば海外派遣のコストが掛からない。さらに、今まで派遣を見送っていた海外関連団体の総会等の国際会合にも、ウェブ開催であれば参加しない理由はなく、より多くのメンバーに参加してもらうことができる。この機を活かして、海外とより広く交流していければと思っており、もう行動を開始している。情報収集や情報提供の目的のためには、ウェブ会議はほぼ遜色ない。参加者とリアルで知り合う機会は海外渡航の再開のときまで先延ばしにすればよいのである。膝を詰めて話すのは密着なので、さらに先延ばしになるかもしれないが。

結び

物事には必ず二面性がある。今般のパンデミックも、過去と同様、現状の制度規制を再考させ、医薬、医療検査機器、オンライン診療、公衆衛生、物流、ネット販売、サービス提供等で、イノベーションを否応なく加速させるはずであるから、イノベーションを護って活かす弁理士の社会的役割は高まるはずであるし、高めなければならないものと思う。そのための弁理士会会務を不要不急とは呼ばない。

不安の中核は、将来の予測がつかないことである。漠然とした不安というのはトートロジーであり、やるが見えずに漠然としているから不安なのである。リアルな絆を多くの人々と結べるごく近い将来を想像し、笑顔を絶やさず、目の前の課題を段階的にクリアしていくことで、不安は殊のほか消えていくものだと楽観している。

Vol. 73 No. 9